

子どもに寄り添う保育を行うためのドキュメンテーション

— つぶやきを拾うエピソード記録からの考察 —

植草 一世

On the Documentation for Helping Young Children Realize Their ideas: Utilization of Episodic Recordings on Children's Utterances.

UEKUSA Kazuyo

保育者達は、子どもや子ども同士や保育者とのやりとりの中でのつぶやきを拾い、その活動を文章化した記録だけにとどまらず、写真や動画として記録し、それらの記録を誰もが目にすることができる場所にパネルで提示するドキュメンテーション（活動公開）を行った。つぶやきを拾うエピソード記録が、子どもに寄り添う保育を行うことにどのように役立っているのかを分析し、ドキュメンテーションの意義を考察した。その結果、B園のエピソード記録からは、保育者達の子どもに対する優しいまなざしが読み取れる。また、子どもの日常をよく捉え、目の前の子どものために素材を吟味して保育を行っていることが分かった。これらのエピソード記録をドキュメンテーションすることで、直接関わらなかった保育者や保護者の理解が得られた。子どもの様子等のドキュメンテーションを意識的に行うことで大人の関心を引く方法として有効であることが分かった。

キーワード：子どものつぶやき、エピソード記録、ドキュメンテーション、保育者

1. 研究園Bこども園について

研究園Bこども園（以下、B園と記す）は、2016年4月に既存の幼稚園と保育園を統合してこども園としてスタートした。就学前の子ども達が安心して過ごせる場となり、子どもの個性を尊重し、様々な遊びを通して共に成長し合える場になるよう努力している。その具体的方法を保育者間で話し合い、保育を進めている。その一環として子どもがいつでも使える素材の部屋「あとリエ」を作った。子どものことを考えた「あとリエ」は、園舎1階中央の部屋となるようにした。保護者の協力も得ながら素材を集め、保育者が子どもの興味関心に合わせて紙や牛乳パックの空き箱、ビーズ等を準備することから始めた。そして、子どもの視線に合わせた棚に造形の素材や道具を陳列、保管できるように、室内を設定した。子どもが自由に触れ、遊びに活用できるよう様々な素材と道具で満たされ充実した「あとリエ」

となるようにした結果、子どものためのアイデアの部屋として、遊びや製作活動を自由に行うことができる環境となり始めた^{1), 2), 3)}。

B園における「あとリエ」は、レッジョ・エミリア市のレッジョ・エミリアアプローチ⁴⁾と呼ばれている子どもの個性や創造性を重視した保育をヒントにした。それは、本研究者がイタリアのレッジョ・エミリア市の視察研修（千葉市民間保育園協会主催2014年11月）に参加したことに起因する。その研修で、レッジョ・チルドレン『Amici di Reggio Children』という非営利の教育団体の中枢のひとつに創造的リサイクルセンターがあり、そこで大人達が市内の地域の商店や工場等で使われなくなった資源を回収整理し、子どもの表現活動に使える素材を、保育・教育の場に供給している活動を目のあたりにした。本研究者は、レミダやアトリエという創造的素材リサイクルセンターの素材が果たす役割

と、また子どもの表現活動を支えるために街をあげて素材の収集を行う方法に感銘を受けた。日本の保育でも取り入れられるのではないかと考えた。

2. ドキュメンテーション（活動公開）

レッジョ・エミリアアプローチについて森眞理(2013)は『レッジョ・エミリアからのおくりもの～子どもが真ん中にある乳幼児教育～』の著書の中で、レッジョ・エミリアの教育法の創設者の一人、マラグッツィが「教育が『子ども・教師・保護者』の三者間の関わりによって成り立つものである」⁵⁾として、大人が子どもに“教える”のではなく、共同して活動に参加することが重視されていると述べている。また、レッジョ・エミリアアプローチの一つである共同活動の考え方が「ドキュメンテーション」⁴⁾によって活かされている。ドキュメンテーションについて森は、子どもについて共通理解するために、「子どもの多様な姿を表すために、様々な媒介（道具）を用いる。玄関、教室や廊下の壁、本棚（ポートフォリオのようにファイルに収納）、天井、窓など、施設内のあちらこちらから語りかけてきます。大切なのは、ドキュメンテーションを『私だけ』のモノではなく、子どもと大人が共有し『公共』のモノとして、子どもの学びの姿を共に歩むという考え方をしているということです。」⁵⁾と説明している。記録を展示公開して、様々な形で共通理解の道具として役立つのである。

レッジョ・エミリアでのドキュメンテーションは、「子どもの多様な姿を表すために、様々な媒介（道具）を用いる。それらは、①子どもが描いた絵やコンピュータグラフィックによる様々な表現、②子どもの身体で表すダンスや劇、③アトリエリスタによる子どもの姿のスケッチや説明（その意味付け）、④子どもが制作した動きのあるモノ、⑤子どもの姿を映し出す映像（音楽・リズム）、⑥教師を含めスタッフによるメモ、⑦子どもが奏でる音（音楽・リズム）、等である」⁵⁾とあるように、様々な方法で行われている。本研究者がレッジョ・エミリア市の研修で見学した時は、保育の記録（メモ）と異なり、子どもの足跡が、保育者間での保育の振り返りなどに活用されるだけでなく、子ども自身が見て自分の遊びや学びに活かすための振り返りを行

うきっかけになるようにしていた。その日の記録だけではなく過去の活動の成果も、子ども達がいつでも取り出せるように保育室にファイルされていた。さらにドキュメンテーションは、保育施設内だけにとどまらず、市をあげての取り組みとなっていて、レッジョ・エミリア駅の通路には子ども達の絵が大きくレイアウトして展示されていた。そして年に1度の5月のレミダ祭りでは、子ども達の作品が広場（ピアッツァ）等に飾られ、地域や保護者、観光客にも見える形で掲示される。市の大人が協力して、子どもに関するより広いコミュニケーションが生まれることを期待した仕組みになっていた。

3. B園でのドキュメンテーション

本研究者が関わるB園の「あとリエ」の実践において、「あとリエ」での素材は幼児が使うのに適しているが、乳児の発達段階からは、自発的に素材を選んで活用するのは無理がある。そこで乳児にとって適した素材とは何かを保育者が考えるようにした。

その試みのスタートとして本研究者は、「あとリエ」や素材が果たす役割、その可能性を具体的に探るために、保育者が「素材の役割」を意識した保育の事例（以下、エピソード記録と記す）を記録し、ドキュメンテーションを意識的に行うことを提案した。それは、保育者間で共有する子どもの日々の成長記録とは別に、子どもの日常のひとつこまから、子どもの活動状況が共有できるようにするものである。それらのエピソード記録を、ドキュメンテーションを目的として玄関や保育室や廊下の壁、本棚など、施設内のあちらこちらから子どもの姿が語りかけてくるように配置して展示（ポートフォリオのようにファイルに収納）を行ったのである。日常使っている日々の記録は、「保育のねらい」にそって子ども達の様子を記載していく。そのため、クラス全体の様子や保育の流れを把握するために有効的である。一方、エピソード記録は保育環境や素材設定を改善していくために、子どもとの関わりや、子どもが遊びに向かう主体的な気持ちに焦点を合わせた記録となるようにするためにB園でのエピソード記録からのドキュメンテーションは、この取り組みに賛同した数人の保育者からスタートさせた。保育者達は子どものつぶやきや子ども同士や保育者との

やりとりの中でのつぶやきを拾い、その活動を文章化して記録するだけにとどまらず、写真を加えて、それらの記録を誰もが目にすることができる場所にパネルなどで掲示した。

4. 目的

つぶやきを拾うエピソード記録とその展示が、子どもに寄り添う保育に役立っているのかを分析し、ドキュメンテーションの意義を考察する。

5. 方法

記録の取り方は、対象の子どもに焦点を置き、子どもへの対応から保育者が感動したこと、子どものささやきやつぶやきを中心に写真等の映像を使って書き出していくエピソード記録を行う。その中から、「だいこんあかちゃん」と「寒天の感触遊び」を取り上げ、さらにそれに関わった保育者に聞き取りを行い、エピソード記録を分析し考察する。

5-1 エピソード記録「だいこんあかちゃん」

- ①記録者：2016年11月 2才児担任
- ②場所：C市にある民間B園と近隣のT氏邸の庭
- ③時期：2016年11月
- ④対象の子ども：2才児、男児（3名）女児（9名）計（12名）

5-2 エピソード記録「寒天のあそび」

- ①記録者：2017年7月 1才児担任
- ②場所：C市にある民間B園
- ③時期：2017年7月
- ④対象の子ども：1才児、男児（5名）女児（15名）計（18名）

5-3 倫理的配慮

植草学園短期大学研究倫理基準に則り実施した。

6. エピソード記録

6-1 「だいこんあかちゃん」

子ども達（2歳児クラス）は、日常的に散歩に出かけている。この頃は、いつもの公園の途中にあるTさんの庭に遊びに行くようになった。Tさんご夫妻は子ども達が訪れると歓迎してくれるので、子ども達は大

喜びである。住宅街にあるが庭は広く畑もあり、花々や野菜が植えられている。ある日、Tさんは子ども達に大根を抜かせてくれて（写真1）、抜いた大根を持ち帰らせてくれた。子ども達は大喜びだった。



写真1 T氏邸の庭で大根抜き

子ども達は、自分の抜いた大根を優しく抱きかかえていた。保育者が「あかちゃんみたいね」と言ったことで、子ども達の間でも「だいこんあかちゃん」と呼ばれるようになった（写真2）。



写真2 だいこんあかちゃん

B園に戻った子ども達は、「だいこんあかちゃんをお風呂に入れる」(写真3)と自分が水浴びをするタライで丁寧に洗った。



写真3 お風呂に入れる

子どもの「お顔がないね」のつぶやきから、早速お顔作りや三つ編みがスタートした(写真4)。だいこんあかちゃんに対して、自分達は「ママとパパ」となって、だいこんあかちゃんを可愛がり始めた。ミルクをあげて(写真4)、自分達が昼寝をするように、「だいこんあかちゃん」も寝かせた(写真5)。



写真4 ミルクをあげるママ



写真5 三つ編みの大根あかちゃんのお昼寝

保育者も子どもと、「だいこんあかちゃんかわいいよね」「笑っているね」と話しながらも、『だいこんあかちゃん』は、栄養士(以下、F先生と記

す)にお願いして、「お料理してもらおう」ことを伝えた。「実はね、今日の給食の味噌汁は、大根なんだから……。」と伝えると、子ども達は「え?あかちゃん?」と反応する子、目を丸くする子を前に、保育者はさらに子ども達の反応を待った。

一人が、「いいよ」と言うと、次々に「そうだね、連れて行く」と答える子ども達であった。「持って行く」ではなく「連れて行く」という表現に大根に命と、子ども達の思いが入っていることを感じた。「だいこんあかちゃん」を大切に抱きかかえながら給食室の前に連れて行き、だいこんあかちゃんをぎゅっと抱きしめてから「よろしくお願いします。」とF先生に渡すことができた(写真6)。



写真6 あかちゃんお願いします

しばらくして、2歳児クラスに栄養士のF先生がやってきた。子ども達の前には、まな板と包丁が用意された。子ども達は、興味津々に見入っていた。F先生は、だいこんあかちゃんが「みんなのごはんになってみんなの中で栄養になる」こと、「いろいろな食べ方ができること」を教えてくれた。そして、子ども達は、大根の「縦切り」「輪切り」「千切り」(写真7)等を見た。



写真7 F先生が大根を「縦切り」「輪切り」「千切り」にする

また、髪の毛になっていた大根の葉も食べられることを教えてもらい、子ども達は、大根の隅々まで観察をした（写真8）。



写真8 大根の観察

大根の一部は、切り干し大根にするために、子ども達が干して毎日観察した。生き生きした大根が、日に日にしぼんで茶色になることが観察できた（写真9）



写真9 切り干し大根 1日目・3日目・1週間後

大根の料理は、1週間続いた。味噌汁、はっばのふりかけ（写真10）、煮物等々、1週間後は、子ども達と一緒に干して作った切り干し大根であった。



写真10 はっばのふりかけ

みんなが最初に食べるのは、お味噌汁だった。大人気の味噌汁を「特別な味がするね」（写真11）と言いながら、あっという間にお鍋はからっぽになった。



写真11 特別な味がするね

6-2 「寒天のあそび」のエピソード記録

水遊び（裸足）や小麦粉粘土などの感触遊びが苦手でもいつも抵抗を示していたA児ではあるが、他児が裸足になり水遊びを始めたことが刺激となり、他児に紛れて裸足になって遊び始めた。友達と一緒に遊ぶことで水遊びにも抵抗がなくなったようで、今ではダイナミックに水遊びをするようになってきた。

そこで保育者は、A児に粘土で車を作って見せると「ぶーぶ」と言って、嬉しそうに抵抗なく触れ始めた。保育者は、日々、周りの素材に興味を示し始めた1歳児の様子から、多様な素材やその感触に触れる経験をさせてあげたいと思った。そして、「寒天」に注目した。それは乳児が口に入れても安心で、ひんやりプルプルした感触が子どもに好まれるのではないかと考えたからである。

しかし寒天を大量に調達して準備することは保育者だけでは難しいので、F先生に協力と指導を受けることにした。そこではまず食事に使う物と遊びに使う物は衛生面から区別すること、例えば、寒天を固めるバットを戸外に持っていかないこと等の指導を受けた。前日に作り、当日に切り分けた寒天をタライに入れること等の衛生面に対する配慮について共通理解を図り、準備を行った。

出来上がった寒天ゼリー（写真12）を子ども達に見せた。プルプルと揺れる寒天を不思議そうに見つめ、保育者が触って見せると次々に触れ始めた。子ども達が感じた感触のつぶやきを保育者が聞いてみたいと思ったので、「冷たいね」とだけ声をかけるだけにして様子を見ていた。手のひらにのせた寒天をギューっと握るとグチャグチャにつぶれる、手



写真12 寒天ゼリー

の平で叩くと弾力で弾かれる等、力のかけ方や触り方一つで変化する寒天の感触に夢中になって触れていた。しばらくすると子ども達は、「ムニムニ」「プルプル」「あわあわ」と次々に声をあげ、保育者には、「不思議な感触」「お豆腐みたい」「石けんみたい」という言葉にならない思いが込められていたつぶやきであることが分かった。(写真13)



写真13 つぶやきながら感触を楽しむ子

指先で突いてみると割れる時、「プルプル」「お豆腐みたい」とのつぶやきを拾った保育者は、カップ等を用意する。さらに、寒天を崩したり切ったりして「パフェ」「スープ」とイメージ膨らませ、お友達に「はいどうぞ」と言いながら遊びが始まった。

0歳児も興味を示して一緒に夢中で遊ぶことが出来た。最後に寒天を集めて大きなタライに入れ、足踏みをして「気持ち良い」と楽しんでいた(写真14)。

握る、潰す、突く、練る、ちぎるなど、触れるものに合わせて異なる動作をする



写真14 寒天足踏み

ことで多様な感触を味わうことができた。寒天遊びを通して不思議な感覚を共有したことが、つぶやきや子ども同士のやりとりにつながり、子どもの気づきや発見、イメージや発想力、手や腕の発達を促す一助となると感じた。また、保育者からの一方的な関わりでなく、個々の特性を理解した上で応答的に関わっていく事が大切であると改めて感じた。

7. ドキュメンテーションの結果

これらのエピソード記録は、廊下に掲示され(写真15)、さらにB園のホームページに掲載された。廊下の掲示は、子ども自身が楽しかったことを思い出し、ホームページは直接関わらなかった保育者や保護者も見ることによって会話となり、子どもを中心としたコミュニケーションが生じた。また、B園の保育職と他の専門職員(栄養士)等の連携が見え、今後の方向性の可能性が見えてくる取り組みとなった。



写真15 廊下のドキュメンテーション

8. 考察とまとめ

これらのエピソード記録を本研究者が目にしたのは、廊下の掲示とホームページによってであった。「だいこんあかちゃん」は、2歳児クラスの廊下に掲示したもの(写真15)であり、「寒天のあそび」は、ホームページに「日々の記録」として掲載されたものである。エピソード記録のドキュメンテーションはコミュニケーションのための記録であるので、「日々の記録」とは目的が違うが、他の保育者や保護者に子どもの姿が伝わりやすい。さらに「日々の記録」と比べると、エピソード記録のようなそれらの掲示から、保育者が子ども達自身をよく

見ていること、そして遊びの振り返りとなっていることが伝わってくる。

B園のエピソード記録からは、保育者の子どもに対する優しいまなざしを読み取れる。また、子どもの日常を丁寧に捉え、目の前の子どものために素材(環境)を吟味して保育を行っていることが分かる。

また、ホームページは、子どもの様子をドキュメンテーションとして意識的に行うことで保護者を中心とした大人への関心を引く伝達方法として有効であることが分かった。

従来の保育者が行っている日常の記録では、子どもや保護者間の共通理解が図れずに「自分だけの保育」に終わってしまうのではないだろうか。

B園の写真を使った「ドキュメンテーション」の取り組みは、まだ始めたばかりである。加えて、長時間保育を行う上で保育者の忙しい業務の中で大変な作業であり、分析にはさらに時間が必要である。しかし、子どものための記録を見直す時、子どもを中心とした保育を行う上で、保育者や保護者、近隣の大人達の共通理解のために必要な方法だと考える。

謝辞

本研究の聞き取りに元B園麻生奈緒美保育教諭、B園の保育者のみなさまにご協力いただきました。また、植草学園大学教授安藤則夫先生、元B園教諭、菅谷愛美さんに校正等のアドバイス等をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 植草一世, 安藤則夫, 馬場彩果, 他5名(2017) 子どもの遊びを活性化させるための素材庫(アトリエ)の可能性(共著), 植草学園大学紀要Vol.9
- 2) 植草一世(2015) 大学附属幼稚園における保育の質を高めるための取り組み—子どもの遊びを活性化させるための素材活用—(単著), 植草学園大学紀要Vol.8
- 3) 植草一世, 植草和典, 萩生田明, 他9名(2017) こどもの遊び・保育環境・素材の役割—エピソード記録から—(共著), 千葉県幼稚園協会紀要Vol.37
- 4) 翻訳森眞理, REGOLAMENTO SCUOL E NIDI D'INFANZIA del Comune di Reggio Emilia (レッジョ・エミリア市自治体の幼児学校と乳児保育所の指針)
- 5) 森眞理(2013) レッジョ・エミリアからのおくりもの～子どもが真ん中にある乳幼児教育～, フレーベル館

